

## ターラントに於ける本多静六

「コロキウム」日独科学交流の伝統」から

東京農工大学名誉教授 阪上信次

東京農林学校在学中の本多静六青年は、明治二十三年七月卒業予定の所をその二月に卒業論文を提出、国内での実地演習を外国ですると申請、その結果「当学期間実地演習のため独乙国へ自費留学を命ず」との破格取扱いの許可証を三月五日にもらう。そして同年（一八九〇）五月ドイツ・ターラント着、ザクセン王国立ターラント高等森林学校（旧森林アカデミー、後に高等森林学校、林科大学を経て、現在のドレスデン工科大学林学科）に入学し林学を学ぶ。

ところで平成七年（一九九五）九月十九日にそのドイツ・ザクセン州ターラントで「ザクセンにおける日独科学交流の伝統」と題するコロキウムが開かれ、明治以来の日独、特に日本とザクセンとの科学交流の歴史について日本からの四名とドイツ側によるものを併せて九題の講演が行われた。これらの講演では、ターラント森林アカデミーの最初の農芸化学教授であったシュテックハルト（Julius Adolf Stockhardt 1809 - 1886）と我が国林学の先駆者本多静六について多くが語られた。因みにシュテックハルトについて言えば、我が国で「化学」の語を最初に使った川本幸民の稿本「化学新書」（文久元年（1861）完成）の巻一頭初には「原本ハ、…医、依、亜、私徳合爾士（イ・ア・ストックハルト）氏ノ所著ニシテ」（注一）とあり、その原本とはシュテックハルト著「化学の学校」『Schule der Chemie』（初版1846年）であり、「化学新書」はその蘭訳書（フニンク訳）を川本が和訳して幕府の番書調所、開成学校の化学教育に用いた稿本である。

日独科学交流コロキウムでの講演は、その後ドイツ側でドイツ語の講演報告集（注2）としてまとめられた。その表紙には本多博士とシュテックハルト博士の肖像写真が掲載されている（4頁・写真1）。本コロキウムでの演題と演者を表1に掲げた。筆者も演者の一人として参加したので、

ここではこれら講演の一部に触れながら、ターラントに関わる本多博士について述べることにする。

ドレスデン工科大学名誉教授プロスフェルド博士と同学林学科教授ウィンハウス博士は「世紀の転換期にターラントで林学を学んだ日本人学生と彼らの日本における活動」（注3）と題する講演の中で、菫蒲町三箇さんご小学校の伊藤伸一前校長のはからいで本多博士のターラント留学時の日記を介して始まった、菫蒲町とターラントとの小学生達の絵の交換交流について「本多博士の生涯を語る時、本多の出生地の学校の校長である伊藤伸一氏の働きに言及しなければならぬ。伊藤校長は本多の日記や記録を我々にもたらし、ターラント訪問の際には熱心に本多について報告、本多の生涯を我々の前に明らかにした。また伊藤校長はテレビドラマのシナリオともなる一つのアイデアを持った。彼は校長をしている本多の出生地の小学校で五学級のクラスの生徒達にまず本多の日記を読ませた。本多の日記にはターラントでの生活、勉学や、高等森林学校、その教授達、学生の宿舍のことなど、さらに森に覆われた斜面に囲まれた風雅なターラントの情景、そして街の周辺にある小橋の架かる畔に水車小屋のあるワイゼリッツ川とシユロイツバッハ川、山の教会、学校校舎、そしてターラントの学生の生活を支えた二十軒の飲食店のことなどが詳細に記されている。その日記の記述は、若い学生の本多が単に勉学だけでなく、ターラントの土地や人々についても強い関心を持っていたことを示している。彼は日記の中で Feilich Dudenの石炭鉱山や製鉄産業にも触れている。ところで伊藤校長は、彼の小学校の生徒達にこの日記に書かれた描写から想像してターラントの街や情景を色彩画に画くよう指示した。こうして生徒達が画いた水彩画が伊藤校長によってターラントにもたらされた（それらはコロキウム会場に貼られてあった）。一方ターラントの学校の生徒達は、自分達が直接見ている街を写生し、その画を日本に送った。こうして伊藤校長のアイデアは双方の学校を結びつける結果を生むこととなった」と。続いて本多博士の優れた林学者としての活動が詳しく紹介された。

筆者は「ザクセンと日本の相互協力の歴史的回顧」（注4）と題して明治

期にドイツ・ザクセンに留学した日本人たち―森林太郎（医学者、文学者、作家ベンネーム・外）、志賀泰山（林学者）、本多静六（林学者）、池田菊苗（化学者）、大幸勇吉（化学者）などについて報告したが、本多博士についてはその業績とともに本多が東京山林学校在学中の明治十八年に兄金吾に送った手紙（注6）を紹介した。

その手紙には本多が入学した東京山林学校の理化学教師志賀泰山と松本収が林学研究のためドイツ・ターラント高等森林学校へ農商務省から派遣される際の別離の宴（明治十八年十月七日）で、留学動機等を述べた志賀の演説が記されている。本多はこの演説に刺激されてドイツ留学の希望を込めて兄に手紙を書いたのだろう。志賀、松本の二人は明治二十一年にドイツ留学から帰国するが、その二年後の明治二十三年に本多は志賀、松本留学のターラント高等森林学校への留学に旅立つ。彼は同年（一八九〇）五月八日にターラント駅に着く。筆者は次の本多の日記（注6）の一部を紹介した。「ターラントに着いたら荷物はステーションに預けたまま直ちに志賀泰山先生からの紹介状を持って、ドクトル・シミット氏のところへ行く。部屋は同氏の隣室となった。……この家は先に志賀先生が留学のため滞在したところで、……私の部屋からは私の行く学校の講堂が見える。この家はクルゲ（Krage 居酒屋）と言う料理屋で、学校の教師や学生がよく訪れるところである」と。この本多が滞在したクルゲの建物は高等山林学校（現在のドレスデン工科大学林学科本館として現存）に隣接して（現在は個人住居として）現存している。（4頁の写真参照）。なおコロキウム当日の会場には、森林学校の教授達と共に写った本多静六青年の写真も展示されてあった。これは新聞にも掲載（4頁・写真2）。

このように日本における近代的林学、林業開拓の先駆者志賀泰山、本多静六及び川瀬善太郎らは何れも明治中期にこのターラント高等森林学校に留学したが、その時の校長は名校長と謳われたドイツ林学の泰斗ヨハン・フリードリッヒ・ユーダイヒ（1828-1894）であった。プロスフェルド名誉教授はコロキウムの講演で、ユーダイヒ校長についてこう述べられた。「ユーダイヒ校長の時代のターラント森林アカデミーに最初の日本人留

生が登録されている。その時代のターラント森林アカデミーは、林学を学ぼうとする外国の学生にも大きい影響力と強い魅力を及ぼす高揚期であった。ユーダイヒはコッタ（1763-1844、森林アカデミー創始者、初代校長でゲート、シラー、フンボルトらと親交あり）以降の森林アカデミーでの傑出した校長である。彼は教育に於いては「森林経理学（森林設制学）」及び森林経済の古典科目を講義した。

またユーダイヒは森林アカデミー発展の「一般計画」を提示したが、其の内容はアカデミーをザクセン王国の経済に資する高度な産業振興に寄与するものにし、教育に於いては数学と自然科学などの基礎的科学的強化するものであった。その教育改革は外国の学生にも魅力あるものであった。また、コロキウム冒頭に挨拶されたドレスデン工科大学メーホルン学長は、その中で「森林アカデミー付属森林植物園（現存）がその時代（1890-1894）の28年間のユーダイヒ校長在任期）に行われた森林植物・種子の交換書が残っています。植物園に現存している東アジアの樹木コレクションはユーダイヒ校長の寄贈によるものです……」とユーダイヒが東アジアの樹木に強い関心をもっていたことを語られた。

志賀、本多の両人はいずれもユーダイヒを林学の師として深く尊敬するとともに、留学生に親愛の情を以て接した人間的にも温かい恩師であったことをこもこも述べている。

即ち志賀は明治二十八年にユーダイヒの講義を基にして「森林経理学」（注7）という書を著したが、その巻頭にはユーダイヒの肖像写真を大きく掲載し、序文で次のように述べている。「サキセン王国ターラント森林学校長枢密評議官博士「ユーダイヒ」氏ハ森林経理学ニ於ル空前ノ泰斗タリ余曾テ獨逸ニ遊学シ氏ニ就キテ斯学ヲ研究シ……当時余ト氏トノ關係ハ一面普通ノ師弟タリト雖一面親子ノ情アリキ師ハ余ヲ万里殊域ノ人タルヲ以テ疎セス頗ル余ヲ親愛シ諒々トシテ終始論ラサリキ余カ半生ノ事業ニ於ル基礎ハ師ノ恩實ニヨリテ形成セラレタルヲ疑ハス……今師ノ眞影ヲ巻首ニ掲クル所以ノモノハ実ニ師ヲ追慕スルノ至情ニ出ツルモノニシテ亦コノ書ヲ読ムモノニシテ師ニ親炙スルノ思アラシメントスルノ微意ナリ」と。

一方本多静六は、一八九〇年の夏季 semester をターラント高等森林学校に学び、その後博士号を取得出来るミュンヘン大学に転じたので、ユードイヒ校長に師事したターラント時代は約半年に過ぎなかったが、帰国後の明治二十七年、ユードイヒの死報が日本にもたらされた時、遠藤安氏は本多の言を引いてユードイヒ氏を追悼し次のように述べている(注8)。

「嘗て本多氏かの地(ターラント)大学に在る際雄大比(ユードイヒ)氏は外国人あるの故を以て特に徐々に講了せりと。又本多氏独り郊外を散道せるに一々偶々氏に遇へり。氏直ちに近接し温手もて本多氏の頬を撫でて「瘦せるなきか」と云えりという。氏の外国人を憐むの実に深しと云ふべし況や其自国人に於いてをや…」

本多ドクトル曰く。「懐へば今より五箇年前余は雄大比氏に従ひターラントの学生等と森林旅行をなし居れり。当時余は師の大恩を蒙りしのみならず、師は常に富澤なる識力を以て余か質問に應ぜられ東洋の孤客として優愛畏れなかりき。…余が最敬慕の雄大比氏は已に逝けり。余は今や学生を指導するの身となり実に今昔の感に堪へざるなりと。嗚呼此師にして此弟子あり。雄大比氏の性行亦高かりしを推想し得べし」。

現在ターラント森林植物園内には初代校長コッタの像があるが、対置してこれを望み得るゾムスドルフの地にユードイヒ博士の記念像が立っている(4頁・写真3)。

ターラントはまさに日本の近代的林業・林業の先駆者達の揺籃の地であるとともに、日独科学交流の源泉地でもあったのである。

注1 化学史学会編集、復刻版「化学新書」上27頁 東京菜根出版(一九九八)

注2 「日独科学コロキウム(於ドイツ・ターラント)講演集」

\* Tharandter historischen Hefte, Vorträge auf dem Deutsch Japaner wissenschaftlichen Kolloquium am 19. September 1995 in Tharandt (以下「講演集」を略記)

注3 「講演集」28頁

注4 「講演集」7頁

注5 「埼玉自治」平成五年十一月号50頁、渋谷克美「資料から見た青年期の本多静六」

注6 本多静六「洋行日誌」明治二十三年

注7 志賀泰山「森林經理学」自序、明治二十八年(一八九五)刊

注8 遠藤安「濁逸森林大家雄大比氏傳」明治二十七年(一八九四)、大日本山林会報、第百一十一号、47頁

(表1) コロキウム「ザクセンにおける日独科学交流の伝統」講演集目次

内 容	講 習 者	頁
市長による序言	ターラント市長 Dr. Micael Beraf	1
ドレスデン工科大学の林学部の代表者の序言	ドレスデン工科大学教授 Dr. Jom Erler	2
ドレスデン行政庁長官の挨拶	Dr. Helmut Weidenecker	3
ドレスデン工科大学学長挨拶	ドレスデン工科大学学長 Dr. Achim Melhorn	5
ザクセンと日本の相互協力の歴史的回顧	東京農工大学名誉教授 博士 阪上信次	7
Julius Adolph Stockhardt とケムニツでの活動	ケムニツ工科大学教授 Dr. Gunter Marx	16
ターラントでのJ. A. Stockhardt の活動	ドレスデン工科大学教授 Dr. Otto Wienhaus 同 大学名誉教授 Dr. Otfried Blossfeld	23
世紀の転換期にターラントで林学を学んだ日本人学生と彼らの日本における活動	ドレスデン工科大学名誉教授 Dr. Otfried Blossfeld 同 大学教授 Dr. Otto Wienhaus	28
Stockhardt の化学教科書とその日本及びドイツでの化学教育への影響	金沢大学名誉教授 博士 阪上正信	31
日本の有機化学—ドイツ学派の影響のもとでの成り立ち—	大阪大学名誉教授 博士 芝 哲夫	36
日本の大学演習林の歴史、組織と任務	九州大学宮崎演習林長 博士 村 房之助	42
古い時代の東アジア磁器とヨーロッパ磁器の組織の比較研究—その相異点と共通点—	フライベルグ鉱山技術大学教授 Dr. Wolfgang Schule 同 大学 Dr. Bernd Ullrich	46
フライベルクの冶金学者 Curt Netto 及び Adolph Ledebur と日本の冶金活動との関係—鉱山アカデミーの歴史のみに止まらない考察—	ドレスデン工科大学教授 Dr. Eberhard Wachtler	51

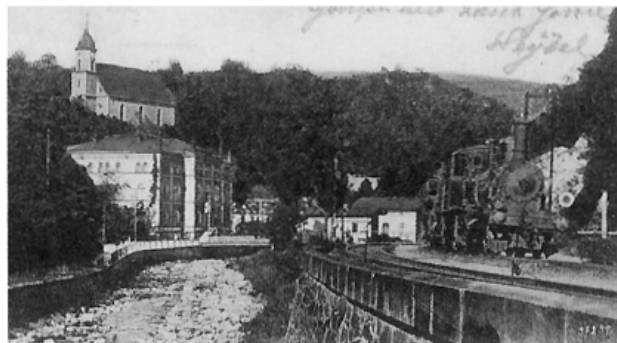


▲本多が留学したターラント山林学校（左）と当時の下宿先（中央） 当時の山林学校の校舎は、現在もドレスデン工科大学森林学科の建物として使用されている。この“古い建物”（今日こう呼ばれている）は1847～49年にザクセン王国建築士 Hanel の指導のもとに完成した。この建物はアカデミーの最初の代表的な講義・研究棟である。写真撮影は1900前後。（P22参照）

▶山林学校の右手山上から街中を撮影したもの



▲（写真1）コロキウム「ザクセンにおける日独科学交流の伝統」講演集の表紙（左：シュテックハルト博士、右：本多静六博士）



▲左手前の建物が山林学校。その上が本多が礼拝に出かけたという教会。右手の汽車はターラントとドレスデンを結んでいる。



▲（写真2）ターラント山林学校での本多静六(1890)右から3人目 左端ファーテル教授（地質・鉱物・土壌学）、左3人目クルチュ教授（金属・物理学）右2番目ノッペ教授（植物学）



◀（写真3）本多が留学した時の山林学校長ユーダイヒ(1828-1894)の胸像。ドイツ林学界の泰斗といわれたユーダイヒには本多静六の他、志賀泰山等も学んだ。（P23参照）